

周辺のな〈発話・伝達〉のモダリティ表現に関する 一考察：日中パラレルコーパスを用いて比較する

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 会林 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/25370

周辺的な〈発話・伝達〉のモダリティ表現に関する一考察

——日中パラレルコーパスを用いて比較する——

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
陳 会 林

A study on the peripheral forms of “hearer-oriented modality”
—to contrast in a parallel corpus of Chinese and Japanese—
CHEN Huilin

Abstract

This paper examines the differences and commonalities between the Japanese and Chinese languages in the process of deriving the peripheral forms of “hearer-oriented modality”. There are two primary methods of deriving the peripheral forms of “hearer-oriented modality”: one being derived from the “proposition-oriented modality”, and the other one being derived from the other kinds of “hearer-oriented modality”. This paper has verified that the first method of derivation must follow a definite direction, and that while Japanese and Chinese are identical in their use of the first method of derivation, they differ in regard to the second.

Key Words

Peripheral forms, Comparison between Japanese and Chinese, Hearer-oriented modality

1 はじめに

モダリティは、〈言表事態めあて〉のモダリティと〈発話・伝達〉のモダリティより構成される¹⁾。同じ〈発話・伝達〉のモダリティを表すのに、異なる表現形式を用いることが可能である。すなわち、〈発話・伝達〉のモダリティ表現は、一つのカテゴリーを成しており、そのなかで、典型的な表現と周辺的な表現が存するわけである。用例(1)を参照されたい。

- (1) a. 一緒に行こう。
 b. 一緒に行かないか。
 c. 不 一起 去 吗?
 否定辞 イッションニ イク 疑問詞
 d. 一起 去。(末尾にイントネーションの上昇を伴わない。)

e. ? 一緒に行く。(末尾にイントネーションの上昇を伴わない。)

f. ? (あなたが) 一緒に行く (のだ)。
 〈誘いかけとして〉

(1) aは通常、典型的な〈誘いかけ〉の表現と見なされる。(1) bは疑問表現から〈誘いかけ〉へと派生した用法であり、周辺的な〈誘いかけ〉の表現である。(1) bと(1) cは対応している。すなわち、疑問表現から〈誘いかけ〉への派生は、日本語においても中国語においても見られる。中国語では、言語外的なコンテキストがある場合(例えば、話し手が相手たる聞き手を命じうる立場ではなく、当該行為の参加不参加を聞き手の意志をもって決めることは、話し手と聞き手の社会地位や親疎関係などより提示されている場合)、(1) dのように明示的なモダリティ表現を用いなくても

〈誘いかけ〉を表すことが可能である。しかし、末尾にイントネーションの上昇を伴わない場合、(1) dと対応する(1) eは、〈誘いかけ〉としては成り立たない。(1) dを日本語に忠実に訳そうとすれば、(1) fのようにいろいろ補足しなければならない。それにしても、(1) fは日本語の〈誘いかけ〉の文としては、馴染みのない表現であろう。言うまでもなく、(1) dも一種の〈誘いかけ〉への派生的用法とみて良いが、この種の派生は、日本語の中には存在しない。

本稿では、周遍的な〈発話・伝達〉のモダリティ表現はどういった派生過程を経て成立したのか、その派生過程に関して日中両言語の間においてどういった異同を呈しているのか、そしてその異同に関して発話行為における話し手の情報の処理原則の観点からどう捉えるべきかを検討する。

本稿に用いる用例は、中国語小説『骆驼祥子』の原作と4人の日本語訳²⁾からなる自作パラレルコーパスより「タラ」をキーワードに検索したものである。ここで断っておかなければならないのは、〈発話・伝達〉のモダリティの周遍的な表現の派生過程における両言語の異同は、「タラ」構文に限って現れるものではないということである。「タラ」をキーワードにするのは、単純に接続辞「タラ」を用いた複文の用例を大量に採取できることと、先行研究³⁾が指摘したように「タラ」構文は文末のモダリティ制約を受けないからである。そして、複文にこだわる理由は、単文よりコンテキストの情報が多く含まれているからである。

2 データの分類基準と処理原則

2.1 本稿における〈発話・伝達〉のモダリティの下位分類

モダリティは文の意味構成上における概念であって、一言語に限ったものではない。日本語はモダリティ表現が非常に豊富な言語であるため、精緻化されたモダリティの分類がなされているといえる。本稿は、モダリティの分類に関しては、仁田(1991・2000)に従う。氏は、〈発話・伝達〉の

モダリティと〈言表事態めあて〉のモダリティを表1,表2のように分類している。

表1 〈発話・伝達〉のモダリティの下位分類 (仁田1991 p.22)

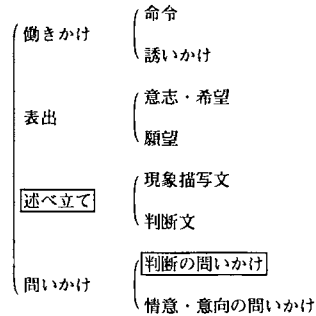


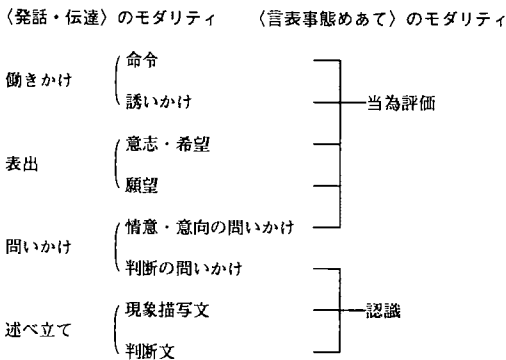
表2 〈言表事態めあて〉のモダリティの下位分類

(仁田2000 p.31)



氏によれば、文は層状構造を有しており、〈発話・伝達〉のモダリティが〈言表事態めあて〉のモダリティを包み込む形で存在している。〈発話・伝達〉のモダリティと〈言表事態めあて〉のモダリティの相互関係に関しては、卓越さの点において異なりがあるものの、すべての文にとってこの両者が必須であるとされている(仁田1991 pp.19~20)。大雑把にいうと、仁田(1991)のモダリティ体系は表3に示されているように、〈発話・伝達〉のモダリティの〈働きかけ〉、〈表出〉、および〈問いかけ〉の中の〈情意・意向の問いかけ〉には、〈言表事態めあて〉のモダリティの〈当為評価〉が潜在化している。一方、〈発話・伝達〉のモダリティの〈述べ立て〉、および〈問いかけ〉の中の〈判断の問いかけ〉(表1の囲み線が付いた部分)には、〈言表事態めあて〉のモダリティの〈認識〉が潜在化している。

表3 <発話・伝達〉のモダリティと<言表事態めあて〉のモダリティの相互関係



2.2 本稿におけるデータの処理原則

第一、日本語のモダリティ表現の典型性は仁田(1991)の選定(3節表4を参照)に基づいて認定する。例えば、

- (2) a. 明几个要是没那么冷呀,咱们早着点出车。
(『骆驼祥子』老舍)
- b. 明日もしこんなに寒くさえないければ、少し早めに出かけようね。
(『骆驼祥子』中山高志訳)
- c. 明日はちっとは暖かいだろうから、その分早く出ればいいんだ。
(『骆驼祥子』市川宏訳)
- d. あした、あたたかいようだったら、はやくでることにしよう。
(『骆驼祥子』立間祥介訳)
- e. 明日お天気が好かったら早目に俵を出すすんじゃ。(『骆驼祥子』竹中伸訳)

の場合、(2) b と (2) d は、仁田(1991)が選定した「シヨウ形」を用いたため、典型的なく誘いかけのモダリティ表現と認定する。(2) c と (2) e は、仁田(1991)が選定した典型的なく誘いかけのモダリティ表現を用いていないため、周辺のなく誘いかけのモダリティ表現と見なすわけである。(※本稿では、実線の下線が付いているのは、仁田(1991)が選定した典型的なモダリティ表現が用いられた文である。)

第二、言表事態を変更した、または言表事態の情報量を増減した場合(すなわち意識の場合)、

当該データは算入しない。

第三、同一の中国語原文に対し、訳者により「タラ」を用いたり用いなかったりすることがある。コンテキストの均一性を保つため、「タラ」を用いない訳文のデータは算入しない。ただし、分析をする際、必要に応じてそれらの用例を引用することがある。

3 データの観察

本節では、表3の分類ごとに、各種の<発話・伝達〉のモダリティにおいて、どのような周辺のなくモダリティ表現が存在しているのか、そういった周辺のなくモダリティ表現はどのように派生されたのかを観察する。表4に示されているように、<現象描写文>、<判断の問いかけ>と<情意・意向の問いかけ>の3種の<発話・伝達〉のモダリティに関して、自作コーパスより周辺のなくモダリティ表現を抽出できなかつたため、分析を省くことにする。

表4 各種の<発話・伝達〉のモダリティの典型的な表現と周辺のなく表現の出現回数

		典型的なモダリティ表現		周辺のなくモダリティ表現		
		出現回数	表現形式 (仁田(1991)による選定)	出現回数	考察対象とする形式	
3.1	働きかけ	命令	43	命令形/連用形+ナ/ヤッテクレ/ヤリナサイ/ヤッテクダサイ/ヤルナ/ヤルヨウニ	62	ノダ/コトダ/タラドウダ/タライ/タラの終助詞的用法
		誘いかけ	7	シヨウ	3	ノダ
3.2	表出	意志・希望	136	シヨウ/スル形/マイ形/シタイ	34	ノダ/コトダ/名詞+ダ/バイ/問いかけ
		願望	0	命令形/ヤルナ	2	名詞+ダロウ/〜ガイ
X	述べ立て	現象描写文	42	—	0	—
3.3		判断文	342	判定の文	171	疑いの文
X	問いかけ	判断の問いかけ	13	—	0	—
X		情意・意向の問いかけ	2	—	0	—

3.1 働きかけ

命令:

総数105例のうち、周辺のなく命令のモダリティ表現と認定できるのは62例ある。そのうち、「タラドウダ」からの派生は33例、「タライ」か

らの派生は14例, 「ノダ」からの派生は12例, 「コトダ」からの派生は2例, 「タラの終助詞的用法」からの派生は2例ある。

このなかで, 「タラの終助詞的用法」は「タラドウダ」または「タライイ」の省略形とみて良い。また, (3) aにおいて, (3) bの「タラドウダ」に対応する疑問表現「会…不会?」が用いられており, (4) aにおいて, (4) bの「タライイ」に対応する当為評価表現「好」が用いられている。ここから, この2種の〈命令〉への派生は, 中国語においても日本語においても見られる現象であることが明らかになった。

- (3) a. 会哼一声不会? (『駱駝祥子』老舎)
 b. 返事ぐらいしたらどうなのさ。
 (『駱駝祥子』立間祥介訳)
 c. うんとかすんとか何とかお言いよ。
 (『駱駝祥子』中山高志訳)
- (4) a. 我看你就还上我这儿来好啦。
 (『駱駝祥子』老舎)
 b. またわたしのところへくることにしたらいいだろう。(『駱駝祥子』中山高志訳)
 c. もう一度わたしの所でやってみなさい。
 (『駱駝祥子』市川宏訳)

一方, 「ノダ」と「コトダ」の〈命令〉への派生は, 日本語母語話者の日常言語生活の中では出現頻度が非常に低い。こういった「ノダ」(5b)と「コトダ」(6b)を用いた命令表現の文は, 翻訳者が中国語原文のニュアンスを十分に尊重して訳したものであるというべきであろう。

- (5) a. 过两天, 你就先去一趟。
 (『駱駝祥子』老舎)
 b. 二、三日したら, お前まず行ってくるんだ。(『駱駝祥子』中山高志訳)
 c. 二、三日したら, お前一度顔を出してごらん。(『駱駝祥子』市川宏訳)
- (6) a. 见事不好的话, 你灭了灯, 打后院跳到王家去。(『駱駝祥子』老舎)
 b. いよいよ形勢不利だと見たら電気を消して, お前は塀を乗り越えて裏の王さんの屋敷へ逃れることだ。

(『駱駝祥子』竹中伸訳)

- c. どうも具合が悪いと思ったら, 明かりを消して庭の裏から塀を越えて王家へ飛び降りろ。

(『駱駝祥子』中山高志訳)

〈命令〉を成立させる条件として, 仁田(1991 pp. 239~240)は下記のように規定している。

[I, a] 話し手は相手たる聞き手に対して働きかけを行いうる立場・状況にある。

[I, b, 1] 話し手は, 相手たる聞き手がある動きを実現することを, 望んでいる。

[I, b, 2] 話し手にとって, 相手が実現する事態は, 都合のよい・望ましい・好ましいものである。

[II, a] 話し手の働きかけを遂行する相手が聞き手として存在する。

[II, b] 聞き手は, 自分の意志でもって, その動きの実現化を計り, その動きを遂行・達成することができる。

[III] 命令されている事態は, まだ実現されていない事態である。

「ノダ」と「コトダ」は本来〈述べ立て〉を表す表現である。中国語原文において, 〈述べ立て〉表現を用いることにより, 当該事態は, 話し手にとって, 都合のよい・望ましい・好ましいことであること(条件[I, b, 2])を顕著に表現し, そこから, 相手たる聞き手によるその事態の実現を望んでいるという意味合いが派生されたと考えられる。中国語原文のモダリティをありのままに表現するのに, 〈述べ立て〉表現の「ノダ」(5b)と「コトダ」(6b)が用いられたと解釈できる。

誘いかけ：

総数10例のうち, 周辺的な〈誘いかけ〉のモダリティ表現と認定できるのは3例ある。この3例はいずれも「ノダ」からの派生である。

「ノダ」の〈誘いかけ〉への派生は, 日本語母語話者の日常言語生活の中ではあまり見られなく, かなり周辺的な〈誘いかけ〉の表現といえる。こういった〈ノダ〉を用いた誘いかけ表現の文(7

b) は、翻訳者が中国語原文のニュアンスを十分に尊重して訳したものであるというべきであろう。

(7) a. 等到快把钱花完, 咱们还是求老头子去。

(『骆驼祥子』老舍)

b. 全部使っちゃったら, また爺さんのところへもらいに行くんだ。

(『骆驼祥子』中山高志訳)

c. お金がとぼしくなったら, おとつあん
んに頭を下げることにしようよ。

(『骆驼祥子』市川宏訳)

〈誘いかけ〉と〈命令〉は、相手たる聞き手にある事態の遂行を求めるといふ点においては、共通している。両者の違いは、話し手自身がその事態に参加するかどうかという点にある。すなわち、〈誘いかけ〉を成立させる条件は、〈命令〉の成立条件のうえに、「話し手自身がその事態の遂行に参加する」という条件を加えるものである。事実、「ノダ」を用いた、〈誘いかけ〉への派生の3例には、いずれも中国語において「咱们」(ワタシタチ)という主語が明示されている。中国語原文においては、〈述べ立て〉表現を用いることにより、当該事態は、話し手にとって、都合のよい・望ましい・好ましいことであることを顕著に表現することができる。さらに、その事態の肯定的当為評価を、「話し手自身も参加する」ということを表明することによりアピールされる。そこから、相手たる聞き手の同行を望んでいるという意味合いが派生されたと考えられる。中国語原文のモダリティをありのままに表現するのに、〈述べ立て〉表現の「ノダ」(7b) が用いられたと解釈できる。

3.2 表出

意志・希望:

総数170例のうち、周辺的な〈意志・希望〉のモダリティ表現と認定できるのは34例ある。そのうち、「ノダ」からの派生は21例、疑問表現からの派生は5例、「コトダ」からの派生は3例、「バイイ」からの派生は3例、「名詞+ダ」からの派生は2例ある。

まず、(8) a)において、(8) b)の「なぜ…ノダ?」

に対応する疑問表現「为什么…呢?」が用いられており、(9) a)において、(9) b)の「タライイ」に対応する当為評価表現「顶好」が用いられている。ここから、この2種の〈意志・希望〉への派生は、中国語においても日本語においても見られる現象であることが明らかになった。

(8) a. 为什么不去卖了它们, 再买上一辆车呢?

(『骆驼祥子』老舍)

b. なぜこの骆驼を売って車を買わないの
だ? (『骆驼祥子』中山高志訳)

c. この骆驼を売って俵を買おう!

(『骆驼祥子』竹中伸訳)

(9) a. 咱们弄清楚了顶好。(『骆驼祥子』老舍)

b. ここではっきりさせちまったらいいじ
ゃないの。(『骆驼祥子』立間祥介訳)

c. 話をはっきりつけとこうや。

(『骆驼祥子』中山高志訳)

一方、「ノダ」、「コトダ」と「名詞+ダ」の〈意志・希望〉への派生は、日本語母語話者の日常言語生活の中ではほとんど見られない。こういった「ノダ」(10b, 12b⁹⁾、「コトダ」(11b)と「名詞+ダ」(13b)を用いた意志・希望表現の文は、翻訳者が中国語原文のニュアンスを十分に尊重して訳したものであるというべきであろう。

(10) a. 多咱够了数, 多咱往墙上一碰。

(『骆驼祥子』老舍)

b. いっぱいになったら壁に叩きつけてや
るのだ。(『骆驼祥子』立間祥介訳)

c. 今にいっぱいになったら, 壁にぶつ
けよう。(『骆驼祥子』市川宏訳)

(11) a. 不见不散! (『骆驼祥子』老舍)

b. 来なかったら承知しないことよ。

(『骆驼祥子』竹中伸訳)

c. 来ないと承知しない。

(『骆驼祥子』市川宏訳)

(12) a. 等我混好了, 我来! 一定来!

(『骆驼祥子』老舍)

b. そのうちに好い仕事が見つかったら迎
えに来るだ。キット来るだ!

(『骆驼祥子』竹中伸訳)

c. 仕事がうまくいったら迎えに来る。き
つと来る。(『駱駝祥子』市川宏訳)

(13) a. 有好买卖呢就再拉一两个；没有呢，就
收车。(『駱駝祥子』老舍)

b. 上客が見つかったら、あと一回か二回
かせいでもいいが、そうでなかったら、
そこで店終いだ。

(『駱駝祥子』市川宏訳)

c. 上客がいたら一人か二人なら引いてみ
るのもよし、いなければさっさとひき
あげよう。(『駱駝祥子』立間祥介訳)

〈意志・希望〉は、仁田 (1991 p.22) 「必ずし
も聞き手たる相手の存在を前提としない」という
点において、〈働きかけ〉の〈命令〉、〈誘い掛け〉
と異なる。従って、〈意志・希望〉の成立条件は、
〈命令〉、〈誘いかけ〉と比べてかなり緩い。本稿
では、〈意志・希望〉の成立条件を、[I] 話し手
にとって、その事態は、都合のよい・望ましい・
好ましいものである、[II] その事態は、まだ実
現されていない事態である、という2点に絞る。

「ノダ」、「コトダ」と「名詞+ダ」は本来、〈述
べ立て〉を表す表現である。中国語原文において
は、〈述べ立て〉表現を用いることにより、当該
事態は、話し手にとって、都合のよい・望ましい・
好ましいことであること(条件[I])を顕著に
表現し、そこから、話し手自身によるその事態の
遂行を決心するという意味合いが派生されたと考
えられる。中国語原文のモダリティをありのまま
に表現するのに、〈述べ立て〉表現の「ノダ」(10
b, 12b)、「コトダ」(11b)と「名詞+ダ」(13b)
を用いられたと解釈できる。

願望：

総数2例のうち、周辺的な〈願望〉のモダリテ
ィ表現と認定できるのは2例ある。そのうち、「〜
ガイイ」からの派生は1例、「名詞+ダロウ」か
らの派生は1例ある。

まず、(14) cのような当為評価表現から〈願
望〉への派生は、中国語においても日本語におい
ても見られる現象である。

一方、「名詞+ダロウ」から〈願望〉への派生
(14b)は、日本語の中ではかなり周辺的な願望表
現と言わざるを得ない。こういった「名詞+ダロ
ウ」を用いた願望表現の文は、翻訳者が中国語原
文のニュアンスを十分に尊重して訳したものであ
るといふべきであろう。

(14) a. 要是有儿子，不象我就得象祥子！

(『駱駝祥子』老舍)

b. もし男の子があつたら、あたしのお
んなでなくて祥子みたいな男だったの
だらうってね。

(『駱駝祥子』中山高志訳)

c. 息子をもつんだつたら、あたしみたい
なのかそれとも祥子みたいなのがいい
って。(『駱駝祥子』立間祥介訳)

「命令形/ヤルナ」を典型的な表現形式とする
〈願望〉は、仁田 (1991 p.241) が指摘している
ように、「話し手の願望に沿う事態を実現・体現
しうる存在を相手たる聞き手として据えることが
できない」という点において、〈命令〉と異なる。

「名詞+ダロウ」は本来、〈認識〉を表す表現で
ある。中国語原文において、当該事態を実現・体
現しうる存在を相手たる聞き手として据えること
ができないことを認識したうえで、〈得〉を用い
てその強烈な願望を有することを表現している。
日本語において判定を放棄する「ダロウ」形を用
いるのは、中国語原文の意味が相手たる聞き手の
意志でもってその事態の実現を制御することがで
きないという認識に起因すると考えられる。

3.3 述べ立て

判断文：

総数513例のうち、周辺的な〈判断文〉のモダ
リティ表現と認定できるのは171例ある。その171
例はすべて〈疑いの文〉からの派生である。

(15) aにおいて、(15) bの「ノカ」に対応す
る疑問表現「难道…？」が用いられている。ここ
から、この種の派生は、日本語の中においても中
国語の中においても見られる現象であることが明
らかになった。

- (15) a. 难道孙侦探并非真的侦探?
 (『骆驼祥子』老舍)
 b. ことによったら孫のやつ、にせ刑事だったのか? (『骆驼祥子』市川宏訳)
 c. 孫刑事が偽者だったなんてこともある
まいな。 (『骆驼祥子』中山高志訳)

- (9) a. 咱们弄清楚了顶好。(『骆驼祥子』老舍)
 <意志・希望>
 b. ここではっきりさせちまったらいい
じゃないの。 (『骆驼祥子』立間祥介訳)
 <意志・希望>

- (14) c. 息子をもつんだったら、あたしみたい
なのかそれとも祥子みたいなのがいい
って。 (『骆驼祥子』立間祥介訳) <願望>

上記のうち、(4) a, (9) aにおける「好」, 「顶好」, および(4) b, (9) b, (14) cにおける「タライイ」, 「ガイイ」は、いずれも<言表事態めあて>のモダリティの<当為評価>表現である。

また、(3) a, (8) aにおける「会…不会?」, 「为什么…呢?」, および(3) b, (8) bにおける「タラドウナノ」, 「ナゼ…ノダ?」は、いずれも聞き手の意志を問いかける表現である。このタイプの問いかけは、仁田(1991 p.49)が指摘しているように、「単に聞き手の意志の有無を聞き手に問いかけるのではなく、話し手の意志の遂行に対する聞き手の意志の有無を問いかけて」いるのである。(3)は、「返事ぐらいしてもらおう。いい?」, (8)は、「この駱駝を売って車を買う。いい?」, というふうに言い換えることができる。このなかで、「返事ぐらいしてもらおう」と「この駱駝を売って車を買う」は、話し手の意志を表す部分である。話し手の意志というのは、その事態に対して話し手が肯定的当為評価を有している、ということもできる。その意味で、聞き手の意志を問いかける表現は、話し手による<当為評価>に賛成できるかどうかを聞き手に問いかける表現でもあると言すべきであろう。

次に、用例(15)に注目したい。

再掲:

- (15) a. 难道孙侦探并非真的侦探?
 (『骆驼祥子』老舍) <判断文>
 b. ことによったら孫のやつ、にせ刑事だったのか? (『骆驼祥子』市川宏訳)
 <判断文>

中国語の文(15) aと日本語の文(15) bは互に対応している。(15) aにおける「?」と(15)

4 周辺のなく発話・伝達)のモダリティ表現の派生過程における日中両言語の異同

本節では、3節の観察結果に基づき、周辺のなく発話・伝達)のモダリティ表現の派生過程における両言語の共通点と相違点を検討する。

4.1 共通点

両言語は、<言表事態めあて>のモダリティ表現からの派生を広範に許容するという点において共通している。そして、<言表事態めあて>のモダリティ表現からの派生は一定の方向性を示している。すなわち、周辺のなく発話・伝達)のモダリティ表現としての<言表事態めあて>のモダリティ表現は、派生して表す種の<発話・伝達)のモダリティに潜在化している種の<言表事態めあて>のモダリティを言語化するものでなければならない。

再掲:

- (3) a. 会哼一声不会? (『骆驼祥子』老舍)
 <命令>
 b. 返事ぐらいしたらどうなのさ。
 (『骆驼祥子』立間祥介訳) <命令>
 (4) a. 我看你就还上我这儿来好啦。
 (『骆驼祥子』老舍) <命令>
 b. またわたしのところへくることにした
らいいだろう。(『骆驼祥子』中山高志訳)
 <命令>
 (8) a. 为什么不去卖了它们,再买上一辆车呢?
 (『骆驼祥子』老舍) <意志・希望>
 b. なぜこの駱駝を売って車を買わないの
だ? (『骆驼祥子』中山高志訳)
 <意志・希望>

bにおける「ノカ?」は、共に〈疑い〉を表す表現である。仁田(2000 p.40)では、〈疑い〉を〈認識〉のモダリティの下位分類として位置づけている。〈疑い〉の文は、話し手の心理活動を表すものであり、問いかけ性がなく、単に不明な点がある—すなわち、はっきりした判定はできない—ということ述べ立てているものであると考えられる。

以上をまとめるならば、日中両言語において共通の派生のし方をしている〈命令〉、〈意志・希望〉、〈願望〉の〈発話・伝達〉のモダリティの周辺的な表現は、すべて〈言表事態めあて〉のモダリティの〈当為評価〉表現より派生され、また、日中両言語において共通の派生のし方をしている〈判断文〉の〈発話・伝達〉のモダリティの周辺的な表現は、すべて〈言表事態めあて〉のモダリティの〈認識〉表現より派生されたことが明らかになった。この派生の方向性は、2.1節表3に示されている〈発話・伝達〉のモダリティと〈言表事態めあて〉のモダリティの包摂関係に由来していると考えられる。

4.2 相違点

ある種の典型的な〈発話・伝達〉のモダリティ表現は、他の種の〈発話・伝達〉のモダリティの周辺的な表現として用いられることがある。この〈発話・伝達〉のモダリティ同士の間で生じる派生に関して、日中両言語は異なる振る舞いを呈している。3節では、日中両言語において、〈述べ立て〉表現から〈働きかけ〉表現と〈表出〉表現へ派生可能かどうかに関して観察した。そこから、日本語においては、〈述べ立て〉表現から〈働きかけ〉表現と〈表出〉表現への派生をあまり許容していないのに対し、中国語においては、〈述べ立て〉表現から〈働きかけ〉表現と〈表出〉表現への派生を広範に許容している、ということが明らかになった。

下記用例の中の中国語の文は、いずれも平叙文であり、〈述べ立て〉表現を採用している。典型的な〈命令〉、〈誘いかけ〉、〈意志・希望〉、〈願望〉

のモダリティ表現ではないものの、日常の言語生活の中では頻繁に用いられる表現である。それに対し、下記用例の中の日本語の文は、日常の言語生活の中では、いずれも使用頻度の非常に低い表現である。従って、本稿では、「ノダ」(5b, 7b, 10b)、「コトダ」(6b, 11b)、「名詞+ダ」(13b)と「名詞+ダロウ」(14b)を採用したこれらの文を、中国語原文の意味上のニュアンスを尊重した上で訳文として位置づける。

再掲：

- (5) a. 过两天, 你就先去一趟。
 (『骆驼祥子』老舍)〈命令〉
 b. 二、三日したら、お前まず行ってくるんだ。(『骆驼祥子』中山高志訳)
 〈命令〉
- (6) a. 见事不好的话, 你灭了灯, 打后院跳到王家去。(『骆驼祥子』老舍)〈命令〉
 b. いよいよ形勢不利だと見たら電気を消して、お前は塀を乗り越えて裏の王さんの屋敷へ逃れることだ。
 (『骆驼祥子』竹中伸訳)〈命令〉
- (7) a. 等到快把钱花完, 咱们还是求老头子去。
 (『骆驼祥子』老舍)〈誘いかけ〉
 b. 全部使っちゃったら、また爺さんのところへもらいに行くんだ。
 (『骆驼祥子』中山高志訳)〈誘いかけ〉
- (10) a. 多咱够了数, 多咱往墙上一碰。
 (『骆驼祥子』老舍)〈意志・希望〉
 b. いっぱいになったら壁に叩きつけてやるのだ。(『骆驼祥子』立間祥介訳)
 〈意志・希望〉
- (11) a. 不见不散! (『骆驼祥子』老舍)
 〈意志・希望〉
 b. 来なかったら承知しないことよ。
 (『骆驼祥子』竹中伸訳)〈意志・希望〉
- (12) a. 等我混好了, 我来! 一定来!
 (『骆驼祥子』老舍)〈意志・希望〉
 b. そのうちに好い仕事が見つかったら迎えに来るだ。キット来るだ!
 (『骆驼祥子』竹中伸訳)〈意志・希望〉

- (13) a. 有好买卖呢就再拉一两个；没有呢，就收车。〔『骆驼祥子』老舍〕〈意志・希望〉
 b. 上客が見つかったら、あと一回か二回かせいでもいいが、そうでなかったら、そこで店終いだ。
 (『骆驼祥子』市川宏訳)〈意志・希望〉

- (14) a. 要是儿子，不象我就得象祥子！
 (『骆驼祥子』老舍)〈願望〉
 b. もし男の子があったら、あたしのようなのでなくて祥子みたいな男だったのだろうってね。
 (『骆驼祥子』中山高志訳)〈願望〉

〈述べ立て〉とは、「話し手の視覚や聴覚などを通して捉えられた世界やある事柄についての話し手の判断・解説を述べ伝える、といった話し手の発話・伝達的態度である」(仁田1991 p.78)。こういった〈述べ立て〉表現が〈働きかけ〉にも〈表出〉にも派生できる中国語は、話し手の判断・解説を基準にする、すなわち話し手本位の言語であるというべきであろう。また一方、こういった〈述べ立て〉表現が〈働きかけ〉と〈表出〉にあまり派生できない日本語は、話し手の自分自身の判断・意向を基準にするのを避け、聞き手の判断・意向にも配慮する言語であるといえるであろう。本稿のこの指摘の妥当性は、木村・森山(1997)にも支持されている。木村・森山(1997)は、疑問文と平叙文を取り上げ、それらの類型の文の文末形式に聞き手の情報にいかにか配慮するかという観点から、「中国語の場合、話し手の認識こそが基準となるのに対し、日本語の場合、聞き手の認識を談話の内部で尊重しなければならないのである」(p.269)と結論づけた。

おわりに

これまでの考察で、明らかになったことをまとめる。

1. 周辺的な〈発話・伝達〉のモダリティ表現の派生のし方は大きく二つに分けられる。一つは、〈言表事態めあて〉のモダリティの表

現からの派生であり、もう一つは、他の種の〈発話・伝達〉のモダリティの表現からの派生である。一つ目の派生のし方に関しては、日中両言語は共通して有しているのに対し、二つ目の派生のし方に関しては、日中両言語は異なる振る舞いをしている。

2. 一つ目の派生のし方に関しては、一定の方向性を示している。すなわち、周辺的な〈発話・伝達〉のモダリティ表現としての〈言表事態めあて〉のモダリティ表現は、派生して表す種の〈発話・伝達〉のモダリティに潜在化している種の〈言表事態めあて〉のモダリティを言語化するものでなければならない。

本稿は複文の主節末のモダリティ表現に限定して比較したが、モダリティは文末の専有物ではない。残された課題は従属節のモダリティに関する考察である。例えば、複文の主節と従属節の接続関係を表すのに、日本語のほうは、接続詞や接続助詞の使用が義務付けられているが、中国語のほうは、その使用が義務付けられていない。こういった接続詞や接続助詞(例えば、本稿のキーワードである「たら」その形式自体)は、文の意味構成上においてどういった役割を果たしているのか、また、接続辞や接続助詞の使用義務における日中両言語の相違点をどう捉えるべきであろうか。目下取り組んでいるところである。

注

- 1) 仁田(1991)の用語を借用。
- 2) 『骆驼祥子』は老舍(1899~1966,小説家・劇作家)が1936年に完成した小説である。計133,965字である。現代会話文学作品の代表作の一つと評価されている。複数の日本語訳がある。本稿に用いた訳本の情報は例文出典を参照。
- 3) ソルヴェン・前田(2005),堀(2005)を参照。
- 4) 用例(12) bにおける「来るだ」は原文ママ。ここでは「来るのだ」と同一扱いする。

例文出典

- 老舍著『骆驼祥子』人民文学出版社 1962年
 老舍著『骆驼祥子』河出書房新社 市川宏・杉本達夫訳 1969年
 老舍著『骆驼祥子』岩波文庫 立間祥介訳

1980年

老舍著『駱駝祥子』 学習研究社 竹中伸訳

1981年

老舍著『駱駝祥子』 白帝社 中山高志訳 1991年

参考文献

- 神尾昭雄 『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』大修館書店，1990.
- 木村秀樹・森山卓郎 「聞き手情報配慮と文末形式—日中両語を対照して—」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版，1997，pp.235～275.
- ソルヴァン，ハリ－・前田直子 「と・ば・たら・なら再考」『日本語教育』Vol.125，2005，pp.28～37.
- 玉地瑞穂 「日本語と中国語のモダリティの対照研究」『高松大学紀要』第44号，2005，pp.17～54.
- 中右 実 『認知意味論の原理』大修館書店，1994.
- 仁田義雄 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房，1991.
- 仁田義雄 「日本語の認識モダリティ」『認識のモダリティとその周辺—日本語・英語・中国語の場合—』第7回国立国語研究所国際シンポジウム第6専門部会，2000，pp.38～51.
- 日本語記述文法研究会編『モダリティ』くろしお出版，2003.
- 堀 恵子 「日本語条件文のプロトタイプの意味・用法と拡張—コーパス調査と言語学的有標性の2つの観点から—」『日本語教育』Vol.126，2005，pp.124～133.
- 益岡隆志 『日本語モダリティ探究』くろしお出版，2007.
- 于 康 「現代中国語のモダリティ構造の階層性」『言語と文化』第3号， 関西学院大学言語教育センター，2000，pp.67～81.